

## Ⅶ考察1－天明三年の浅間泥流と畑について－

### 1. ハッ場地区の天明泥流の流下―――関 俊明

#### (1) 両岸の地形と天明泥流

流長76.2kmの吾妻川は、吾妻郡の中央を東に貫流し、渋川市で利根川右岸に合流する。水源と利根川合流点との1,000mを越える比高を用いた水路式発電所が、この間約30カ所で稼働している。この隧道を流れる水量と今日の見かけの水量が本来の吾妻川の水量となることは、天明泥流<sup>1)</sup>の水量を考える上で確認しておく必要がある。

吾妻川の中流部の「関東の耶馬溪」と呼ばれる「吾妻溪谷」（長野原町川原湯～吾妻町松谷）は、昭和10年国の名勝に指定され、流れは変化に富んだ奇岩の峡谷を東へ下る。両岸は高間山や王城山などと同時期に形成された第三紀末の火山噴出物が吾妻川の浸食によって生み出されたものであり、吾妻溪谷付近では碓氷峠から暮坂峠にかけての南北に連なる山稜を横切るように流れていく。山稜に沿った方向ではなくそれに逆らうかのよう横切る形で流れることから、これらは「横谷」と呼ばれる。これは、他の利根川水系の支流河川にはみられない特徴といわれる。この吾妻溪谷の上流域にハッ場ダム建設予定水域が位置している。

この地域で、平地は吾妻川に沿ってわずかに分布しており、階段状の河岸段丘となっている。これらの平地は、この地区の主な居住地であり、農業生産の中心にもなっている。このうち、上位・最上位の段丘面は2.1万年前に堆積した応桑泥流堆積物（図1）<sup>2)</sup>を基盤とし、その上に重なる関東ローム層中には、1.1万前に噴出したと考えられる浅間－草津黄色軽石層が最大で約2m堆積することが確認されている。

長野原からハッ場にかけての人家の集中する場所はほとんどが段丘面であり、これらの地域には4～5段の段丘面<sup>3)</sup>があり、上位から「最上位段丘」・「上位段丘」・「中位段丘」・「下位段丘」と呼ばれている（図2）。最上位段丘は、吾妻川とは80～90mほどの比高をもち、川原畑や林の集落がこれに該当し、応桑泥流の土砂が堆積している。上位面はその比高が60～65mの段丘で、中棚や長野原町山村開発センターなどが位置する。この上位段丘でも50mを越える応桑泥流の堆積が確認されるという。中位段丘は吾妻川との比高が30m前後で、総合運動場・堂西・長野原市街地・尾坂・小倉・下田・上湯原などが該当する。この面には、厚さ1m以上の天明泥流堆積物の堆積が確認されている。下位段丘面は河床からの比高が10～15mの段丘で中位段丘とは異なり限られた箇所のみにはしかみられない。旧長野原第一小学校の南・横壁の対岸などである。これらのうち、天明泥流堆積物は、中位段丘から下位段丘にかけて存在していることが、発掘調査や周辺の踏査により確認できる。

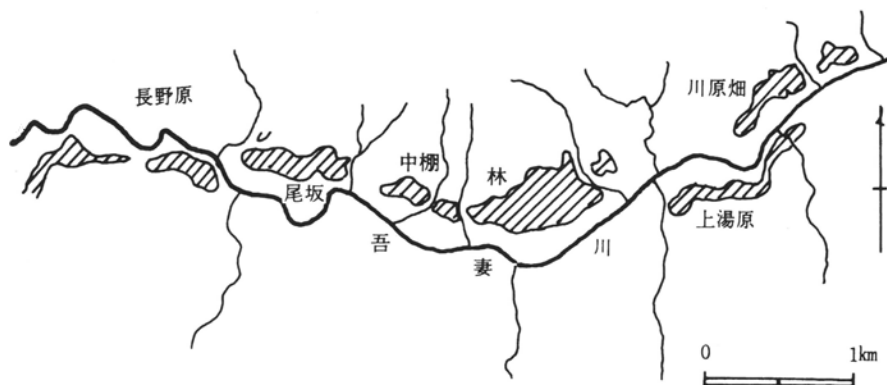


図1 応桑泥流堆積物の分布（『長野原町の自然』より引用。）

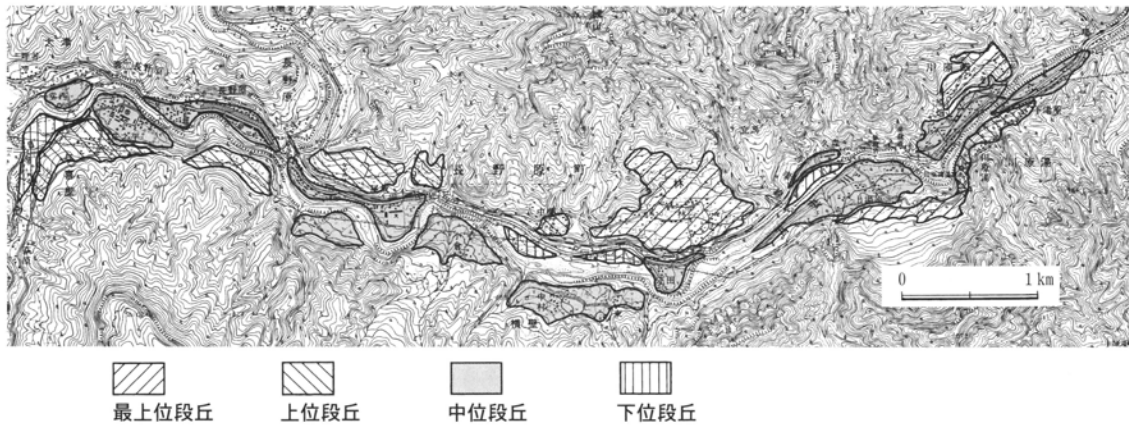


図2 段丘面の分布（国土地理院地形図「長野原」2.5万分の1を使用し『長野原町の自然』を編集。）

天明三年の噴火は、5月9日（以下新暦）にはじまって、その後しだいに激しくなっていく。8月に入ってから噴火では、軽井沢で52軒の家が焼失し、坂本宿と松井田宿では降下物の重みで家が潰れている。運命の8月5日に発生した鎌原火砕流と土石なだれは北麓の鎌原村を8mにも及ぶ土砂で埋め尽くし吾妻川に流れ込む。土石なだれは、泥流と化し吾妻川さらに利根川に合流し、下流にあった140の村々を埋め尽くし銚子沖や江戸湾へと流れ下っていった。この際、県内分の犠牲者は、1500人にものぼるといわれている。その後200年の年月を経て、近年吾妻川や利根川の泥流に埋没した遺跡が、沿岸で確認されている。図3に吾妻川流域分（渋川市まで）の天明三年浅間災害に関する遺跡地点図を示した。同図には、As-A軽石層厚線等を示した。<sup>4)</sup>

天明三年の浅間山噴火に関しては、多くの文献史料が残され、一方で鎌原火砕流・土石なだれによって埋もれた嬬恋村の埋没村落鎌原村や吾妻川を流下した泥流により埋没した渋川市の中村遺跡などの発掘調査の成果が知られている。平成6年度からはじまったハッ場ダム建設に伴う発掘調査からの天明三年浅間災害に関する調査成果が蓄積されはじめてきており、この内容を本書では扱っている。

## （2）泥流到達範囲

ハッ場ダム建設予定地内を中心とした吾妻川流域内の天明泥流堆積物の認識作業として、ハッ場ダム建設予定地から縦断面流下範囲の上流域10.5kmについて、現在残されている伝承の聞き取りや流域の踏査をおこない「天明泥流到達範囲図」を作成した。これは、現時点で筆者が情報を集約し得たものに、発掘調査資料を加えたものである<sup>5)</sup>。今後の資料の追加により、さらに詳細な経過復元がなされることを期し、今回提示したい。範囲図は発掘調査や伝承・踏査により確証を得るにいたった範囲を太線で表示することとし、推定部分とは区別してある。また図には、右岸長野原町大字川原湯字金花山・左岸同川原畑字ハッ場に建設されるハッ場ダム体躯範囲と天端高となる標高586mラインを追加した。

「天明泥流の流下に伴いハッ場ダム建設予定地付近でおこった堰上げにより、上流の長野原中心部を含む吾妻川流域の泥流埋没被災が発生した」という話も聞かれる。可能性は否定されないが、その話がクローズアップされることで「予定ダム湖規模の決壊」があったなどの解釈もなされるにいたっている。しかしながら本資料作成において、詳細な被災域を確認したことで、流路の地形に制約されながら流下したことがわかる。ダム建設予定地付近のみだけでなく、地点地点で小刻みな堰上げがあった可能性も考えられる。「天明泥流到達範囲図」とともに、被災遺跡と天明泥流に関する伝承踏査地点についてもその一部を集約した。本図が、特異な火山泥流と位置づけられる天明泥流の流下に関する分析資料となれば幸いである。

本図の作成には、長野原町教育委員会をはじめ、多くの地元関係者にご教示を頂いた。ここに感謝申し上げる。